



日本植物分類学会 ニュースレター

No. 4

Feb. 2002

目 次

年頭のあいさつ	2
諸報告	
第1回日本植物分類学会賞受賞者の決定	3
評議員メール会議報告	3
お知らせ	
日本植物分類学会第一回大会で開催されるシンポジウムについて	4
総会における審議事項について	4
評議員会開催のお知らせ	5
2002年度野外研修会のお知らせ	5
関西地区講演会報告	
全体の報告	6
楽しく過ごせた一日	8
「GISを用いた自然環境情報の活用法」について	9
日本分類学会連合	
日本分類学会連合の設立	11
設立記念シンポジウムの紹介	12
書籍紹介	
紀伊大島植物目録	18
改訂・近畿地方の保護上重要な植物	19
連絡員から冬便り	
北方草木便り・2・	20
コケ便り・2・	22
会員消息	23

年頭のあいさつ

会長 加藤雅啓

2002年の年が改まってもう1ヶ月以上がたちました。会員の皆様にはますますご健勝のことと存じます。新・日本植物分類学会が設立されて2年目に入ったわけですが、新学会としての足固めを確かなものにして、さらに発展するという次のステップに踏み出す時期であると思っております。皆様のご協力をお願いいたします。

新学会としていくつかの活動に取り組んでいます。まず、学術雑誌とニュースレターの刊行です。英文誌「Acta Phytotaxonomica et Geobotanica」(略称・APG)と和文誌「日本植物分類学会誌」(略称・分類)を発行していますが、アジアにおける研究発信拠点になることがわれわれの願いです。ニュースレターはいうまでもなく情報交換の場です。これらがよりよいものになるようにと、担当者一同日々奮闘しております。われわれの雑誌・ニュースレターですので、どしどし原稿を投稿していただいて、さらに成長するよう皆様のご協力をお願いいたします。

これまで、野外研修会(ニュースレター1号参照)、関西地区講演会なども開きました(ニュースレター今号6頁参照)。新しく設けられた学会賞も選考されています(ニュースレター今号3頁参照)。一方、絶滅危惧植物についての委員会も引き続いて活発に活動しています。植物データベースあるいは生物多様性情報は分類学にとってますます重要になっていますが、これに関する委員会も動いています。

研究費は研究の土台ですので、その確保は研究者にとってとても重要な問題です。国の厳しい予算の中で科学研究費は増額され、分類学関係では「生物多様性」が時限つき課題として採択されています。各分野の科研費の採択件数はその分野の活発さのバロメーターと見ることができます。ご存じのように、採択件数は申請件数に比例します。科研費等にどしどし応募して、分類学を大いに盛り上げて行きたいものです。

本学会は植物分類学関連学会連絡会、自然史学会連合で活動するなどして、関連する学会と連携を図っています。学会間の連帯を強めるもう一つの動きがありました。去る1月12日、19の分類学関係の学会が加盟する日本分類学会連合が設立されました。さまざまな分類群毎の学会が結集した組織で、連絡会をさらに発展させたものです。先の評議員会で加盟が承認されましたが、今度の総会で正式加盟が討議されます(ニュースレター今号10頁参照)。

本学会の活動の大きな目玉になると思いますが、国際植物分類学連合(IAPT)の国際シンポジウムが2004年に日本で開かれることがIAPTで正式に決まりました。アジアの植物分類学をリードする場になることが期待されています。本学会を世界にアピールする絶好のチャンスになると思いますので、盛大な集会になるよう、IAPTシンポジウム2004準備委員会では準備をはじめています。これについてもご協力をお願いします。

新学会として第1回の大会が来る3月に東京(新宿)で開かれます。大勢の会員の方々が参加されるよう願っています。学会でお会いできるのを楽しみにしています。

諸報告

第1回日本植物分類学会賞受賞者の決定

学会賞審査委員会委員長 永益英敏

平成14年1月30日(水) 名古屋大学博物館におきまして、日本植物分類学会賞審査委員会が開催されました。日本植物分類学会ニュースレター2号(平成13年8月発行)で募集いたしました第1回学会賞には、4名の方の推薦がありました。その中から、審議の結果、下記のように受賞者を決定しましたので報告いたします。

大橋広好 氏(東北大学名誉教授)

堀井雄治郎 氏(和賀山塊自然学術調査会・角館高等学校教諭)

大橋会員はマメ科を中心として多数の論文を発表し、東アジア地域の植物誌や図鑑等の執筆にも努められました。また国際植物分類学連合命名法委員会種子植物委員、国際植物情報連合地球植物誌委員会委員を務められ、国際命名規約の翻訳など、専門分野だけでなく広く社会的にも貢献されたことが評価されました。

堀井会員は東北地方の植物について調査・標本収集を重ね、特に和賀山塊自然学術調査では主導的な役割を果たし、その成果は「和賀山塊の自然 - 和賀山塊学術調査報告書 - 」(1999年)に発表されました。その結果「和賀岳自然環境保全地域」が拡大されるという動きにつながり、和賀山塊の保全強化に大いに貢献したことが評価されました。

評議員メール会議報告

庶務幹事 梶田忠

ニュースレター3号(平成13年11月発行)でお知らせしましたように、評議員メール会議が2001年12月17日-28日に開催され、2001年度収支決算案、2002年度暫定予算案、2002年度事業計画案が承認されました。3月に行われる総会までは、ここで承認された事業計画案、予算案を指針として、会務が進められます。

お知らせ

日本植物分類学会第一回大会で開催されるシンポジウムについて

日本植物分類学会第一回大会準備委員会

2002年3月15日の午後1時 - 6時に、シンポジウム「ヒマラヤ産植物と菌類に関する研究の最近の動向」が、ヒマラヤ植物研究会との共催で開催されます。

日本の研究者によるヒマラヤの植物の研究は、1950年代に始まり、1960年からは本格的な調査が行われるようになりました。最近は多くの研究者がネパールやチベットを訪れ、活発な調査研究を行っています。このようなヒマラヤの植物の研究の歴史と、最近の調査による研究成果を話題として提供して頂き、討論を行いたいと思います。

話題提供者とその題目は次のとおりです。

1. 大場秀章: ヒマラヤ植物研究50年の歴史を振り返って
2. 土居祥兌: ヒマラヤ産菌類の研究
3. 樋口正信: ヒマラヤ産コケ類の研究
4. 宮本 太: ヒマラヤ産イグサ属の分類学的研究
5. 若林三千男・秋山 忍・大場秀章: ヒマラヤ産ユキノシタ属の分類学的研究
6. 門田裕一: ヒマラヤ産トリカブト属の分類学的研究
7. 米倉浩司: ヒマラヤ産ハルトラノオ属の分類学的研究
8. 鈴木三男・能城修一・高橋 晃: ヒマラヤにおける木材解剖学の展開

総会における審議事項について

庶務幹事 梶田忠

3月16日(土)に開催される総会において、以下の議案を審議して頂きます。会員各位の参加をお願いします。

2001年度事業報告

2001年度決算報告

2002年度事業計画

2002年度予算

次期監事の選出について

細則変更について(議事録署名人に関する事項、学会賞受賞者選考委員会の名称変更)

日本分類学会連合への参加について

評議員会開催のお知らせ

庶務幹事 梶田忠

日本植物分類学会第1回大会の開催に合わせ、下記の通り評議員会を開催します。関係各位の出席をお願いします。

日時： 3月15日（金曜） シンポジウム終了後（午後5時を予定）

会場： 未定（関係者各位において連絡します）

評議員会においては、総会における審議事項と同様の内容が審議されます。その他の審議事項についてご意見、ご希望がございましたら、評議員、会長、幹事、委員のいずれかにお伝え下さい。

2002年度野外研修会のお知らせ

庶務幹事 梶田忠

今年度の野外研修会は、南谷忠志さんに世話人をお引き受け頂き、9月27日（金）～29日（日）に宮崎県で行います。予定している研修場所は、宮崎県中部と北部の各地で、キバナノツキヌキホトトギス、オグラコウホネ、ナガバノイシモチソウなど、様々な固有種や希少植物が観察できます。定員は30名、参加費は30,000円（宿泊、懇親会、弁当、貸し切りバス代全て含む）を予定しており、詳細はニュースレター5月号でご連絡します。

関西地区講演会報告

全体の報告

頌栄短期大学 福岡誠行

学会統合を受けて、植物分類地理学会でおこなっていた講演会を関西地区講演会として継続することになった。岡本素治さんに相談し大阪市立自然史博物館で、2002年1月20日(日)に開催した。参加者は70人ほどであった。博物館での開催だったので子どもの闖入もあり、ご愛嬌であった。

定刻の10時半に、東京から馳せ参じられた加藤会長の挨拶をいただき、私の進行役で講演会をはじめた。講演会は次の5つの演題でおこなわれました。なお懇親会は大衆的中華料理店(岡本素治氏談)で5時半の予定が5時10分頃に繰り上がって、早々にビールの栓が抜かれ、8時に終了した。

岡本素治, 岡田博, 塚谷祐一: ヤブガラシの2倍体と3倍体について

野外観察でヤブガラシに実をつける株と実をつけない株があることに気がついた。前者は2倍体($2n = 40$)で後者は3倍体($2n = 60$ のはずが59)であった。2倍体と3倍体では花粉の稔性や孔辺細胞にも違いがある。ヤブガラシは北海道西南部から琉球などに広く分布するが、2倍体の株は関東以西に限られているようである。種子をつくらない3倍体の方がより広く分布しているのはなぜか?

3倍体のヒガンバナは救荒植物の一つとみなされ、そのために栽培され分布を広げたとする巷説がある。3倍体のヤブガラシが救荒植物であったなら、ヒガンバナのように分布を広げるきっかけになるかもしれない。岡本さんはヤブガラシ救荒植物説を立証しようとしたかったようである。牛蒡のようなヤブガラシの根を食べたが、あく抜きがうまくいかなかったという。このことは彼の面目躍如とするところであるが、ヤブガラシの3倍体だけが救荒植物になったとは考えにくい。建部清庵著「備荒草木図」にはヒガンバナはノミネイトされていないので、ヒガンバナ救荒植物説は怪しいと思っているが、いかがなものか。

美和秀胤: ジャゴケ類の分類

ジャゴケ属は多年生で無性芽ができないジャゴケと、1年生で無性芽ができるヒメジャゴケがある。日本のヒメジャゴケはDNA解析によると2型あり、北海道の黒松内低地より北にNタイプが、南にSタイプが分布している。これら2型の間で遺伝的交流は認められない。中国にはSタイプと雲南タイプがあることがわかった。形態的には違いが認められないが、DNAの塩基配列からは種分化がおこっている。北川尚史氏がマクロのレベルで問題を明らかにされていたので、ヒメジャゴケを研究材料に選んだそうである。

村上哲明:シダ植物の理想の分類をめざして - 海外の野外研究と実験室の仕事(DNA解析, 染色体, 交配実験など)を組み合わせ、いかにして表題の問題に近づくか?

理想の分類とは生物の類縁と実態を反映したものである。高次の分類(属以上)では系統分類であり、かつては困難とされていたが、今はDNAで容易に解析できる。種分類では生物学的実態を反映したものである。種は生殖的に隔離され、遺伝子型が統合されていて、独自のニッチをもつもので、種ごとに形態が異なる必然性はない。理想の種分類をおこなうには、遺伝的、細胞学的に解析し、野外調査により生態の特性を解析し、さらに生物学的実態のある種を記載することである。(ホウビシダは省略)シマオオタニワタリは形態的には違いがないが、DNAの塩基配列には大きな違いがある。この違いは被子植物では科の違いに相当する。ジャワで調べたがAタイプは木の低いところに着生し、Bタイプは高いところについている。AとBを人工的に交配しても雑種はできなかった。AとBは生殖的に隔離されている。また山の標高の高いところにはCタイプがある。

懇親会の席での村上氏談:ボゴール植物園ではシマオオタニワタリを亜種で分類するようにと頼まれている。種で分けられると、形態的に違いがないA、BとCを別の種カバに分けないといけなくなる。亜種で分類されるなら、種カバを分ける必要がないからである。

やはり懇親会の席でのひそひそ話:DNA分類学会を分離させてはどうか。今なら多数決で勝つかも知れない。しかし熟年組は近い将来間違いなく少数派になるから、この分離案は総会に提案しないことになった。

北川尚史:植物用語の歴史

北川さんは定年退職した(再就職されている)。書斎に集まった本をみていると、植物の歴史についての本がけっこう集まっている。これらの本をみていると早く使え使えといわれているようで、なんとなく圧迫感がある。この際、これらの本を使って植物の用語の歴史について調べた。宇田川榕庵の「菩多尼訶経」などの貴重な文献をみせてもらいながら、どんどん時間が通り過ぎていった。講演の一部が「分類」1巻63 - 70頁に「心皮という用語の由来」の表題で掲載されているので、詳しくはそちらをご覧ください。

高野温子, 三橋弘宗, 鈴木武, 永吉照人:GISを用いた自然環境情報の活用方法

高野さんの講演はハイテク機器を駆使して話された。これらの機器が使えればいろいろ情報発信ができ面白そうであるが、思うように動いてくれないのがハイテク機器である。詳しくは布施さんが書いてくれるので、省略する。

楽しく過ごせた1日

織田二郎

5人の演者全ての人が内容の濃い、わかりやすい話をしてくださったので、1日があっという間に過ぎ去った。この会は旧植物分類地理学会講演会のよき伝統を生かして再出発したのだ、ということが私の胸によく伝わってきました。プロとアマの協力、共同の場として発展してきた伝統を継承した会になったと思います。お世話していただいた大阪市立自然史博物館のスタッフの皆様には感謝します。

3倍体で実を付けないヤブガラシがいかにして日本全土に分布を広げたのか？岡本氏の話は「ミステリー」を聞いている心地であった。ヤブガラシの情報提供をインターネットで呼びかけたところ、思いもかけない未知の人からの連絡が相次ぎ、大いに調査が進んだそうである。私は個人なのでホームページは持っていないけれど、そう言ったこともこれからは取り入れていかなあかな、と思った。

外部形態では全く区別できないがDNAやアイソザイム解析から日本産のヒメジャゴケには北海道南部を境界にしてN型とS型の2種に分けることができそうだという美和氏の話はこれまでの分類学の常識を覆す考え方で美和氏の若さとあいまって新しい時代の訪れを実感させられた。私は今ミヤマカンスゲを調べているが美和氏の示された地域(北海道南部)を境にそれより北にはこのスゲは分布していないのでよく理解できた。

生物の種を考える時、その実体に即した分け方をすべきだという村上氏はその調査方法としてDNA解析、交配実験、アイソザイム、生育状況(環境)の観察などを挙げておられた。そのどれを取ってみても研究機関に職を持っていない我々には大変なことであるが、少しでも工夫して挑戦したいものだ、また共同研究などの方法で補足することも可能ではないかと思った。

植物学用語が日本に入ってきた歴史を宇田川榕庵の「菩多尼訶経」(1882)の実物(復刻版?)など多数の書籍を持参されて解説してくださった北川氏の話はこれまで多くの新種を書かれ、植物用語に実践的に苦闘されてこられた氏の経験から来る迫力があつた。

GISなるインターネットと地図ソフトとExcelを組み合わせた植物の情報入手方法や研究への活用法の紹介をしてくださった高野氏と三橋氏の話はとても魅力的であったが、パソコン嫌いの私たち団塊世代のものには厳しかった。でも、なんとか緯度経度を入力すれば分布地図が描けるという所くらいはマスターしたいものだと言いに聞かせたものでした。

総じて、研究技術は日進月歩であり、ついていくのは大変であるけれども、何とか頑張っていこうと言うのが感想である。「なんだかんだといってもやはり一番大切なことは植物を見る目だ」と言って下さった田村氏(大阪市立大学)の一言に夢を託して!!

「GISを用いた自然環境情報の活用法」について

兵庫県立人と自然の博物館 布施静香

GIS (Geographic Information System : 地理情報システム) は多くの人にとって馴染みのない言葉なのではないでしょうか。私も昨年までは聞いたこともありませんでした。GISとは、簡単に言うと、従来の表形式のデータベースに位置情報(地図)が加わったものです。博物館は自分達の持っている情報を多くの方により分かりやすく発信する為に地図を利用しようと考えています。その一手段としてGISが用いられています。この講演では、GISの活用例と、多くの方が簡単に利用するための方法が紹介され、最後にデモンストレーションが行われました。

活用例としては、1. 学校教育や生涯学習支援、2. 研究への利用があげられていました。1では、現在兵庫県立人と自然の博物館のホームページで試験運転中の「地図で調べる兵庫の自然」というサイトが紹介されました。自分の関心ある生物のデータ(例えば種名、採集年など)を検索して、植生図や標高図などの背景図を選んで分布図を表示させるというものです。ただし、博物館からの情報公開方法については現在、(1)登録データの出典の表示を行う、(2)稀少種などは一般公開しない、といった事が考慮されているとのことでした。2. では「森林植生の立地解析とその潜在分布域の推定」という研究例が紹介されました。この研究では、標高、傾斜角、土壌、地形などの環境要因を現存植生図に重ね合わせて解析する際にGISが用いられています。また、標本採集地点に年平均気温と最大積雪深を重ね合わせた例も紹介されました。



「地図で調べる兵庫の自然」(講演スライドより借用)

「地図で調べる兵庫の自然」や「環瀬戸内いきものマップ」(インターネットGIS)は、利用者登録さえすれば誰でも利用が可能だそうです。既に登録されたデータに基づく分布図の作成のみならず、各個人が新たに情報を登録することもできます。現在兵庫県立人と自然の博物館では、水生昆虫や淡水魚などではGIS化が進んでいますが、植物では殆ど進んでいません。博物館でも収蔵さく葉標本からのGIS化を進めていますが、まだまだ途上段階だそうです。

いずれにしろ、GISは「便利な道具」として使用するものだと思います。現在、位置情報のついたデータを簡単に作れて分布図がかけるソフトが公開されています。「百聞は一見にしかず」ということで、興味のある方は一度関連ホームページを覗いてみられると良いかと思います。

- ・ <http://hitohaku.jp> 「地図で調べる兵庫の自然」: 兵庫県立人と自然の博物館
- ・ <http://www.mus-nh.city.osaka.jp/menu.html> 「環瀬戸内いきものマップ」: 環瀬戸内地域自然史系博物館ネットワーク推進協議会(事務局は大阪市立自然史博物館)

編集後記

今年の冬は暖かい日が多いですね。私の住んでいるところに広がる湖は、今、冬鳥がたくさん集まってにぎやかです。しかし、冬の盛りは過ぎた、という感じでしょうか。湖岸では葦焼きが始まりました。近所の神社に生えていたヒラタケはそろそろ店じまいです。季節は少しずつですが、着実に移っていきますね。みなさま、風邪など引かないよう気をつけて。ぜひ、学会で会いましょう！

〒464-8601 名古屋市千種区不老町
名古屋大学博物館
西田佐知子
電話：052-789-5764 ファックス：052-789-5896
(ファックス番号がかわりました！)
Email: nishida@num.nagoya-u.ac.jp

日本分類学会連合

日本分類学会連合の設立

千葉大学 綿野泰行

昨年(2001年)のニュースレター2号(Aug. 2001)において、動物と植物を横断した分類学関連学会の連合体(日本分類学会連合)を設立する動きがあることが井上健さんにより報告されました。その後の経過について説明します。

最初の会合(6月27日)の後、設立準備委員会が作られ、関連学会に設立趣意書が送られました。そして今年(2002年)の1月12日の午前に、動植物を合わせて19の加盟学会が参加して設立総会が行われ、その日の午後と13日に設立記念シンポジウムが開催されました。シンポジウムの内容及び設立趣意書については、秋山弘之さんの報告や日本植物分類学会のホームページをご覧ください。

これらの動きをうけて日本植物分類学会では、9月26日に東大駒場キャンパスで行われた評議員会において加盟問題について話し合いました。自然史学会連合など既設の学会連合組織が存在することから、新しい連合設立の意味が不明瞭であるとの意見もありましたが、加盟によるデメリットも特に考えられないことから、参加する方向で意見がまとまりました。その後、正式に設立趣意書が届けられましたが、加藤会長と連絡をとった結果、本学会ではまだ総会での承認を得ていないので、1月の連合設立総会時には“参加予定”という立場で臨むことになりました。従って、日本植物分類学会は正式にはまだ連合に加盟していません。植物分類学関連では日本シダ学会、地衣類研究会、日本蘚苔類学会、日本藻類学会、種生物学会が設立時からのメンバーとなっています。

設立総会では、連合規約(案)の修正・承認の後、総会(加盟団体ごとに2名ずつ派遣された代表者で構成される)により役員が選出されました。連合代表は加藤雅啓(東大)、副代表は松浦啓一(科博)、庶務幹事は友国雅章(科博)、会計幹事は伊藤元巳(東大)、Web担当幹事は朝川毅守(千葉大)、ニュースレター幹事は高久元(北大)、監査員が三中信宏(農環研)と平野義明(千葉大)となりました。加盟団体の分担金については、現在は動物分類学会連合から引継いだ財産があるので、当面は徴収しないそうです。今後の活動予定については、ニュースレター(メール発信が中心)、シンポジウム開催、一般会員向けメーリングリストなどです。この連合をいかに活用するか、各団体が主体性を持って積極的に考えてほしいという意見が執行部からなされていました。

日本植物分類学会の連合への加盟の件は、今度の3月の総会で議題として提出されます。植物分類学関連の他学会も既にほとんど正式に加盟していることを考えると、特に加盟に際しての問題点は考えられません。むしろ、これだけ大きな組織に我々の学会だけが加盟していない事の不利益の方が大きいでしょう。日本分類学会連合は、社会全体に対する“分類学”の顔として機能し、社会での認知度を向上させることを主目的とし

て謳っています。我々の学会としても、この目的の遂行に積極的に参加していくべきだと私は考えています。

設立記念シンポジウムの紹介

兵庫県立人と自然の博物館 秋山弘之

日本植物分類学会も加盟している植物分類学関連学会連絡会は、ここ数年にわたり、情報交換や学会誌の交換、統合会員名簿の作成、さらには年1回のシンポジウム開催など、着実な活動をおこなっていた。実は動物分類学関係にも2年まえに設立された同様の組織、日本動物分類学関連学会連合がある。この2つの組織は、対象とする生物群こそ植物と動物と異なっているが、分類学をその根幹に据える学会の集まりという点において、役割と性格はきわめてにかよっている。従って、両者が力をあわせようと統合的な連合を組織することはごく自然な発想だろう。より学際的な研究活動や事業を行なううえでも、研究費枠の増大などを関係官庁に働きかける政治的な意味においても、望ましいことだと思う。

設立時の参加（ならびに参加予定）学会数は21にものぼっている。会員数は、もっともすくない日本シダ学会の120名から日本昆虫学会の1500名までと、学会の規模はかなりばらつきがあり、また参加学会のあいだには当然ながら思惑の違いもあるだろうから、今後の活動方針を定め成果をあげてゆくのはなかなか大変なことだとおもわれるが、加盟学会の一員として各学会が積極的に関わってゆくことがたいせつではないだろうか。なお、日本動物分類学関連学会連合は新連合の設立とともに発展的解消となったが、植物分類学関連学会連絡会は連合設立後も存続し、独自の活動を継続しておこなうとのことである。

設立総会については綿野氏から報告されるとのことなので、ここでは連合設立を記念して2002年1月12日13日の2日間、総会と同じ会場である国立科学博物館新宿分館で開催された記念シンポジウムの様子を簡単に紹介する。新しく発行される連合ニュースレターに講演要旨が掲載される予定なので、私にとって興味深かった内容を中心に触れることにしたい。

なお、日本分類学会連合の設立のいきさつと趣旨については、旧日本動物分類学関連学会連合ホームページに納められているニュースレターバックナンバーの第3号に詳細が掲載されているので、興味のある方はご覧いただきたい。

12日のプログラム

連合代表挨拶

初代連合代表となった加藤雅啓氏より、21学会（うち2学会はオブザーバー）により設立が承認されたことが紹介された。全国規模の分類学関連学会の総数はおよそ30ほど

であり、近い将来これらの学会の参加も期待されるとのことである。

日本学術振興会学術事業部長兼文部科学省学術調査官 宮嶋和男 「日本の科学行政と分類学」

宮嶋氏は先般行なわれた科学研究費制度改革の際に、中心的役割をはたした人物である。新しい制度の紹介がおもな話であった。基本的数字として、科学研究費の昨年の新規採択率は、平均20%程度、また充足率は78%。厳しい経済情勢の中でありながら、支給総額は平成13年度1580億円から1703億円へと増加しているとのこと。全国の申請可能研究者数17万人のうち、実際に申請件数は(重複分を含めて)11万3千件。少なく見積もっても、約3分の1がはじめから申請していない計算になる。これをふまえて、各研究分野への予算配分は総申請件数に強く依存することが改めて強調され、その端的な例として、最近20年の間に生物系と理工系で予算配分の比率が逆転していることが指摘された。会場からは、科学研究費が採択されなかった場合の、より詳細な理由の開示が必要との意見が出され、基盤研究に限るが来年度からは第一段審査結果のABC評価だけでなく、キーワード的なものを付加する予定であるとの返答があった。

自然史学会連合がそうであるように、分類学会連合からも科学研究費審査員を出せるようにすること(つまり分類学分野の採択率を上げる?)が連合設立の目的のひとつであり、その意味から宮嶋氏を講演者の一人として依頼したのだろう。

環境省野生生物課長 黒田大三郎 「野生生物の種の保存」

環境省が取り組みつつある、以下の事業について紹介された。

- 1) 生物多様性条約に基づく国家戦略の策定 2002年2月には素案が作成され、環境省HPで公開の予定。
- 2) 自然公園法の改正 すぐれた風景の保護だけでなく、生態系の保護にも取り組む。
- 3) 生物多様性センターの運営 富士吉田市に設立された当センターの標本庫の充実をはかるうえで、分類学会連合との共同を考えたい。
- 4) ヨハネスブルグ・サミットで議論される予定のカルタヘナ議定書(遺伝子組替体の国際間移送とリスク評価、ならびに生物多様性保全)への取り組み。

琵琶湖博物館館長 川那部浩哉 「生態学と分類学の協同」

2年前、日本動物分類学関連学会連合設立の際に、「多くの生態学者が分類学になにをもとめるのかといえば、それは同定を頼みたいだけ」と、ある意味で喧嘩をうるような発言があったとのこと。もっとも本人の弁によると、生態学者はそれだけ分類学者を対象種の同定などに関してつよく依存しているのであり、もっとしっかりしてほしいという愛情の逆説的表現なのだそうだが。

聞いていて一番おもしろいと感じたのは、

- 1) できれば自分の専門とはちょっと離れた、あるいは自分達の仲間にはほとんどいないような分類群の専門家を養成してほしい
- 2) 分類群ごとに専門家を確保するか、あるいは専門家以外でも扱える同定のための道具類をつくってほしい

という指摘であった。

また、生態学研究センター設立時の裏話として、生態学の重要性がひろく認識され追い風が吹いているときには、それを積極的に利用してはどうかという指摘を役所筋から受けたとのこと。生物多様性保全が社会的に認知されつつある現在、分類学連合の設立もちょうどそんな時期にあたるのかもしれない。

社団法人日本動物学会理事 八杉貞雄 「生物の共通性と多様性」

発生の様式を考えると、共通性と多様性（つまり生物の系統と進化）がキーワードとなる。1) 原腸形成に先立つ背腹軸形成に関与する遺伝子群は、昆虫と脊椎動物を較べてみると、相同遺伝子あることが判明したこと、2) ヒトの眼の形成に不可欠な遺伝子は、ハエの眼をつくる遺伝子と同源性が高いこと、3) ホヤには尾部をもつオタマジャクシ型と尾部を持たない型の両方が近縁種間でみられるが、ともに尾部をつくる遺伝子を持っているが発現の有無に差があること、という3つの例をあげて、系統と進化への発生生物学の深い関わりが説明された。

日本動物学会ではガイアリスト21というプロジェクトが進行しているが、日本分類学会連合にもぜひ協力していただきたいとのことである。（ガイアリスト21の詳細については、日本動物学会のホームページを参照してください）

社団法人日本植物学会前会長 駒嶺穆 「植物生理学と植物分類学 その今昔と21世紀への展望」

以前は植物学といえばすなわち分類学という時代があった。しかし学生だった当時の東京大学理学部植物学教室の様子を振り返ってみると、植物分類学に対する多くの人に共通する印象は、1) 植物名に精通しているナチュラルリストの集団であり、2) 個々の植物群を個人レベルで研究する群雄割拠的状况（他人の領分である分類群には口出しできない状況）があり、3) classification（分類という行為）に対する主観的主張が繰り返されるばかりで、かつ4) 実験的証拠が乏しい、というものであったという。学問的魅力に欠ける必然的結果として、分類学を志望する学生はほとんどいなかったとのこと。（たしかに、東京大学から一時期分類学講座が消滅したのは歴史的事実ですね）

この状況が変わったのは、ゲノム科学の発達によるところがおおきい。分子系統はいうに及ばず、種の特徴を表す形態的形質の違いが遺伝子の相違として認識されるようになったことが、種分化が実験的に証明されたことを意味している。ここに植物生理学、遺

伝学と分類学が進化・系統という観点で深く結びつくことになり、このことは今後の分類学の発展の基礎となるはずだと述べられた。

話の中で、「故郷のみをみた植物学者は、自然の唯一部を知るにすぎない」という明治時代に東北大学で教鞭をとったモーリン博士の言葉が紹介されたが、確かに今一度深くこの言葉の持つ意味を考える必要があるのかもしれない。

自然史学会連合代表 森脇和郎「ゲノム時代の分類学への期待」

日本分類学会連合とその構成学会・目標がかなり重なる組織である自然史学会連合では、両連合の今後の役割分担をどのように考えているのか知りたかったのだが、この問題についての言及はなかった。ただ、自然史学会連合での経験から、森脇氏が個人的感想として述べられたのは、1) 様々な分類群を扱う学会がひとつの組織をつくったのだから、個別性を大切にしながらも仲良くやってください、そして2) 少なくとも外部からみた場合、連合が一本化されている印象をあたえるようにしておくことが大切だ、ということであった。特に物理学や天文学において、近年の大型プロジェクトが予算化されそして成功してきたのは、ことにあたるに際しては内部での強い結束があったからだという指摘は重要だと思う。また大型予算獲得に関しては、国民への説明責任が伴うことにも触れられた。国民への還元としては、それが役にたつのか(生活・産業面への貢献)あるいはおもしろいのか(文化の向上)の二つしかないのだから、そのことをしっかりと認識している必要があることのこと。

特別講演 荒俣宏「分類学の先駆者は偉かった・・・が、しかし」

実はこの講演があるので遠く三田から参加したのだが、来た甲斐のある非常に充実した内容であった。1時間に渡る話をかいつまんで説明する。

妖怪、風水、陰陽道について講演すると、聞きにきている人の様子が最近ずいぶんと変化している。最前列には華やかな女性達が陣取り、次の数列を子供達が占め、以前からきていた「オタク」の人たちはその後ろにいるのである。大衆性というのはこんなところに端的に現れるようだ。150年ほど前、英仏において一般人の間に natural history が大流行した時期がある。その原因は、

- 1) natural history を楽しむコストが安くなった。特にガラスの物品税が下がり温室や水槽が庶民にとって身近になり、水中生物飼育が大ブームとなった。また移動にもなう経費も格段に安くなった。
- 2) なにか新しい、そして心をワクワクさせるものがそこにあると感じさせられた。熱気球に争うようにして乗ったのが女性であったように、このワクワクさせるものにもっとも敏感なのが女性である。

女性がブームを引っ張るのは、いつの世でも同じらしい。フランスの博物学者であるビュフォンは、自然誌の記述にロマンチックな小説の文体を持ち込み、フルカラーの図

版を提供するなどして、「平和でハッピーな博物学」を提唱し、これが世間の女性を博物学に殺到させることとなった。もちろん度を過ぎればいろんな弊害もでてくることはたしかなのだが（水中生物飼育が大ブームとなったときは、英国海岸のおもだった採集地の多くは生き物がいなくなってしまうそうです）分類学が心を浮き立たせる何かを提供することができ、そして講演会を開いたときに最前列に一般の女性が座るようになれば、分類学も大衆性と人気を得たことになるだろう。

現代の写真家、TV番組撮影班は、世界のあらゆる場所にでかけて写真を取り、番組をつくっている。その行動範囲はとうてい分類学者の及ぶところではない。では、分類学者が彼らにどのような貢献をしているのかといえば、「名前の問い合わせ」に回答するかできあがった番組の監修をするくらいでしかない。これはもったいない状況ではないか。もっと積極的に関わって、今後どんな協同を働きかけられるのかを考えてみてはどうだろうか。（ここでチョコエッグのフィギュアについて言及されたのですが、うまくまとめられないので省略します）硬直化した、ネガティブな権威を振りかざしているようでは良くない。たとえば、今は理想的な研究環境といえる英国のキュー植物園でさえ、100年ほど前には（当時の園長が自分が興味のない分野への予算振分けをしぶったりしたために）キュー植物園があるがために植物学が発展しないのだとまで批判されたことがあった。

同定のサービスについては、もっと利用しやすい環境を整えるべきだ。たとえば、インターネット上のホームページがこれほど発展したのは、ヤフーなどのポータルサイト（いろんな検索ができる入り口）があるからであり、同定に関してもここにさえ行けば適当なサイトが検索できるというものを設ければ、利用者にとって非常に便利であろう。

分類学は理科系のように見えるが、実は学名・和名など命名に関してはきわめて文科系的な学問である。一般の利用者にとって学名・和名がきわめて取っつきにくく理解しにくい場合がある（アナグラムなどの内輪受けの奇妙な学名や、生物のランクと語の上位下位関係が逆転している和名、例えば属の和名と種の和名が同じである場合はよくありますね）。特に学名は語の選択に体系化がみられない。こういったことは学問を大衆化するうえでおおきな障害となる。

最後に、分類学を利用する立場からお願いを3つ。

1) みんな仲良く、競って、分かち合おう

これには、明治にはいっても長く繁栄した尾張博物学が良い手本となるだろう。

2) より大きな世界とつながろう

海外の研究者と協同するのは当然として、異分野にも一般市民やアマチュアの世界にもつながってゆくことが大切。

3) 古いものを大切に。

標本、文献、建物、とりわけ引退あるいは亡くなった研究者のノート類・コレクションがあまりに粗末に扱われている。その管理運用の方策を探るべし。ボランティアの活用も積極的に考えてはどうか。

13日のプログラム

加盟学会の自己紹介（詳しくは各学会ホームページをご覧ください）

「これからの分類学」以下の6講演が行われた。

藤井伸二（大阪市立自然史博物館）「社会教育を通じた分類学の発展」
分類学と社会、学校との関わりについて言及

上島励（東京大学）「分子データと記載分類」
形態のみにもとづく記載分類の問題点を指摘

伊藤希（筑波大学）「生物多様性情報学 世界の状況・日本の事情」
分類学者による分類学者のための分類学者がつくったデータベース仕様の紹介。詳細がホームページ（<http://www.nomenclator.org>）公開されていますので、ぜひ参照してみてください。学名と種タクサ概念を切り分けてデータベース化するという発想が新鮮でした。

矢原徹一（九州大学）「保全生物学と進化生物学 21世紀の分類学の課題」
保全生物学と分類学との関わりについて事例をあげて言及

戸田正憲（北海道大学）「生物多様性のインヴェントリー・モニタリングと分類学」
生態系多様性とその機能解明に重点をおいた国際的プロジェクトIBOYと分類学との関わりについて紹介

佐々木猛智（東京大学）「分類学における古生物学と現生生物学の関係」
化石に固有の問題点を指摘するとともに、貝類において原生種が化石種のシノニムとなる事例と軟体動物データベースを紹介

書籍紹介

紀伊大島植物目録

京都大学大学院農学研究科附属亜熱帯植物実験所，2000年6月発行． B5版，83pp．

紀伊大島の植物目録を紹介します。これまでの紀伊大島に関するフロラリストには並河ら(1940)と渡部ら(1976)があるが、正式な出版物ではなかったり(しかし、両方とも1995年に「大島植物目録1」および「大島植物目録2」として亜熱帯植物実験所より復刻されている) 標本の引用明示がないという欠点があった。今回の目録は、すべて標本に基づいたものであり、標本の保管場所も明らかである。わずか2年(1998~1999年)の調査で、大島の植物相を解明するには限界があると思われるが、それでも概要を把握するには充分すぎるほど綿密なデータだ。高等植物については、「大島植物目録1」に記録されながら、今回の調査で採集できなかった種名リストが挙げられており、今後の研究の進展への配慮が読みとれる。

残念ながら、本書は非売品のため、個人での入手が難しい(主要研究機関等には既に配布済みなので、閲覧は可能だろう)。今回はご無理をお願いした結果、実験所のご好意で30部を分類学会員に提供していただけることになりました。下記の要領に従ってお申し込み下さい。

配布数：限定30部(1人1冊のみ) 無償(送料は自己負担)。

対象：植物分類学会会員。紀伊大島および周辺地域(あるいは紀伊半島、太平洋沿岸、島嶼等)の植物分類学・植物地理学の研究をされている方を優先したいので、該当者は手紙にその旨をご明記下さい。なお、部数に限りがあり、ご要望にお応えできない場合はご容赦願います。

申し込み締切：3月20日。

申し込み方法

角形4号の封筒に、310円の切手を貼って返信用の宛名を書き、「冊子小包」と朱書したものを下記住所宛に送付。

〒649 - 3632 和歌山県串本町須江
京都大学大学院農学研究科附属亜熱帯植物実験所

参考：「紀伊大島植物目録」の目次

- ・紀伊大島の蘇苔類：秋山弘之(兵庫県立人と自然の博物館)
- ・高等植物：榎本敬(岡山大学資源生物科学研究所)・狩山俊悟(倉敷市立自然史博物館)
- ・和歌山県紀伊大島の照葉樹林に生育するきのこ類：種坂英次(近畿大学農学部)

追記) 今回の配布に漏れた場合、著者の方々に別刷りをお願いしてはいかがでしょうか。なお、著者の負担軽減のために、送料等のご配慮をお願いできれば幸いです。

(大阪市立自然史博物館 藤井伸二)

改訂・近畿地方の保護上重要な植物 レッドデータブック近畿 2001

編著 レッドデータブック近畿研究会 発行 財団法人 平岡環境科学研究所
2001年8月31日刊行 A4判165ページ(カラー口絵4ページ)
定価: 3,000円(本体税込み), 送料: 200円

「近畿地方の保護上重要な植物」2001年改訂版が完成いたしました。
1995年版は日本初の地方版レッドデータブックとして各方面から高い評価をいただきましたが、改訂版では次のような点が改良されています。

絶滅の危険度に応じたランク評価

絶滅危険度のランク評価を行い、「絶滅種」「絶滅危惧種A～C」「準絶滅危惧種」に分類しました。評価の過程を明示するとともに、ランク付けされた種類の分布域ごとの生育状況が付表に示されていて、それぞれの種の置かれている状況について理解を深めることができます。

保護上重要な地域の例示

保護上重要な植物が集中する地域を選定して特徴を記述しました。地図も掲載しています。

貴重種のカラー写真

図鑑で写真を見る機会が少なかったカミガモソウ、図鑑に載っていなかったハリマムシグサ、近縁種との見分けが難しいミズキカシグサなど、20種の貴重な植物や生育環境のカラー写真を掲載しました。

保全についての解説を掲載

種の保全をするための今後の課題について検討しました。現状を認識することに留まらず、これからの自然のあり方について考えてゆくための一助としていただきたい一章です。

レッドデータブックとして、保全の教科書・文献として、そして近畿に生育する植物の現状の記録として役立つと思います。お求めは、書名と必要数を明記して、ファックス・葉書・電子メールで下記宛に申し込んでください。折り返し書籍と郵便局の振替用紙が送られてきます。

お申し込み先

〒215 0001 神奈川県川崎市麻生区細山8 8 財団法人平岡環境科学研究所
「近畿レッドデータブック」係(担当:本郷)
FAX: 044 955 5476 E-mail: hongo@hiraokaken.or.jp

(環境設計株式会社 丸井 英幹)

連絡員から冬便り

北方草木便り・2・

森林総合研究所北海道支所 河原孝行

しばれる冬を生き抜く北の植物

北海道の冬は雪に閉ざされ、何も見つからない・・・終わり。というのでは、許してもらえまい。今回は北海道の冬と植物の生活の関わりをのべよう。

冬の環境が与える大きな要因には、雪と温度と湿度が上げられる。

雪は北海道でも日本海側や中央山脈は多雪地帯で、高茎のチシマザサが優占して生えている。一方、太平洋沿岸（苫小牧～えりも、十勝、釧路）は少雪地帯で丈は1mにも満たないスズタケが優占している。その間の適当な量の雪が降るところではその中間の草丈のクマイザサが分布している。これら3種はほぼ雪の量に対応してほぼ見事にすみ分けがなされている。日本海側でも海岸近くは海流の影響で多少とも温暖なためか雪が少なくクマイザサが生育している。雪はかなり保湿保温をする効果があるらしく、春に雪が溶けて桿の先が頭を出した頃、遅霜に会うと、雪に出ていた部分が黄色くなって枯れてしまう。真冬でも雪の少ない年に好天が続くと、マツなど常緑高木では上部が暖められて気孔が開かれ盛んに蒸散が生じるものの下部はまだ凍って水があがっていかないことが起こる。その結果、樹冠で水切れが起こり、立ち枯れるという現象が見られる。雪が冬の寒さと乾燥からよく植物を守っているのである。しかし、雪は必ずしも植物にいいことばかりではない。雪のかぶった枝や小さな幹はその重さで折れることもしばしばである。また、折れないまでも、しなって地面に接触したアカエゾマツやエゾマツの枝は暗色雪腐れ病菌に犯されやすい。温度や湿度が保たれる雪の下の地面はこのような病原菌にとっても好適な環境なのである。ちなみに、アカエゾマツやエゾマツ、トドマツで倒木更新が盛んに行われるのは倒木上ではこれらの病原菌が少ないためと考えられている。

寒さもまた植物にとっては厳しい環境要素である。名寄に近い北大雨竜地方演習林（母子里）では、-41.2 という日本最低温度記録がある。このように寒冷な内陸部ではしばしば凍裂という現象が起きる。これは幹の中に生じている微少な割れ目に溜まった水が凍ることで応力を生じ、割れるものと考えられる。特に、心材部に多く水分を含む水喰い材といわれるトドマツではよく見られる。冬にクロスカントリースキーで山をあるいていると、時に、凍裂によって生じたと思われる激しい樹の割れる音を耳にすることができる。

こんな厳しい北海道の冬は植物たちに大きな選択圧となっているはずだ。北海道の多様な環境圧の中で植物がどのような分化を遂げているのかはたいへん興味深いのだが、ま

だ十分に研究されていない。

厳冬の中、雪の下では着々と春咲きの植物たちが蕾を膨らませている。



トドマツに生じた凍裂（常呂郡置戸町）

写真提供：今川一志博士

コケ便り・2・

岡山理科大 西村直樹

日本蘚苔類学会第31回大会(石川県小松市)へのお誘い

本学会の大会は毎年夏に各地を転々としながら開催しています。コケを研究材料とする様々な分野の方々や全国各地の熱心なコケファンが集まり、わが国のコケ学に関する貴重な情報交換の場となっています。平成14年度の大会は8月1日(木) - 3日(土)に石川県小松市の小松ドームおよび同市日用町の「コケの里」で開催されます。同定会(初日夜)、研究発表や懇親会(2日目)、またコケ庭観察ツアー(3日目)が計画されています。詳細は、本会のホームページ (<http://sc1.cc.kochi-u.ac.jp/~bryosoc/>) をご覧下さい。

コケ関係新刊図書

植物の自然誌 プランタ 第78号

(ISBN4-87639-753-8, 580円 + 税, 2001年11月1日, 研成社発行)

「コケの植物学」が特集され、コケ学にまつわる最新の情報が5人の方々によって紹介されています。読み易く、また読み応えのある内容になっています。本特集一読の薦めは、編集後記でI氏によりコケ学へのエールとともに熱く語られています。プランタ編集部のご許可を得ましたので、編集後記の最後の文章を転載させていただきます。「本号の特集が、コケの美しさを知らない人の目を開かせるきっかけになればと期待する。もともとコケの美しさを見ている人は、さらに今日のコケ学の発展を学ぶこともできる。」ぜひ、ご一読下さい。

日本蘚苔類学会新役員

昨年夏の総会で平成14年1月から2年間の新役員が次のように選出されました。会長(神田啓史, 国立極地研究所)、庶務幹事(西村直樹, 岡山理科大学)、会計幹事(田邊光夫, 平岡環境科学研究所)、会計監査(出口博則, 広島大学)、編集幹事(樋口正信, 国立科学博物館)。本学会への問合せ、事務連絡は庶務幹事へ、また入会、バックナンバーの申込みは会計幹事をお願いします(連絡先はいずれも「合同名簿」に掲載されています)。

国際蘚苔類学会(IAB)の紹介

1969年に発足し、世界のコケに関する様々な分野の研究者がメンバーとなっています。ニュースレターが隔月に発行され、世界のコケ学に関する最新情報が掲載されています。また、大会が2年に一度開催されています。2001年度の大会はインドのLucknowで2002年1月23 - 30日に行われ、3つのシンポジウムや様々な分野の研究発表、野外観察ツアー(Kumaon Hills)が予定されています。IABの年会費は約1300円(ニュースレター購読料を含む)です。IABに興味がある方は広島大学の出口博則氏に連絡して下さい。